

「今、とのさま介護中。」

宮城・柴田町 福祉劇団・鶴亀





「殿、どのようなヘルパーがよろしいでしょうか?」「そうじゃの。○○の△△はいるか?」などいきなり観客の名前を呼ぶアドリブに会場は大ウケだ。最後には、「介護が必要になったときには介護保険を利用すればいい。だけど、できれば介護保険を使わないような元氣な老後を過して」と会場に呼び掛けた。

講演を聞いて福祉問題を難しく考えるよりも分かりやすいお芝居で介護保険を解説してみても——そんな思いから演劇に興味を持つ地域の芸達者たちが劇団を旗揚げしたのが平成三年。これまでの舞台は一五〇回を数える。

「福祉劇団・鶴亀」(代表・菊地真一さん)は、「今、とのさま介護中」「寝たきりになったお殿様」「おまかせ福ちゃん」など身近な福祉問題をテーマに、大上段から振りかぶるのではなく、方言丸出しで明るく、笑いながら、それでいて真面目に演じる。

役者はもちろん脚本、大道具、小道具まで全て町の住民である劇団員がこなす。しかし、素人芝居と侮るなかれ、町内外からこれまでに一五〇回に及ぶ公演依頼があることが証明するよう



に、公演は玄人はだした。

この日もお睦元の公民館分館の婦人部の新春のつどいに呼ばれて、「今、とのさま介護中」で会場を笑いの渦に巻き込んだ。ストーリーは、病に伏せているお殿様が、家臣に「介護保険を利用しては？」と勧められて、どのような手続きが必要なのか、どのようなサービスが受けられるのか、などを喜劇仕立てで演じるもの。会場に悠然と現れた殿様役の菊地さんはすでに立派な殿様衣裳を身にまとっている。聞けば家からその出で立ちだとか。ところが幕が開く直前の舞台裏の菊地殿様は白装束。「どうして？」と聞くと、「全部着てこないと忘れちゃうから。けど人間忘れるってことはいいことだよ」とイタズラっぽくそして意味深長に笑う。さらに、「掌に人という字を書いて三回飲み込めば緊張しないよ」と戯ける団員の姿。どう見ても誰も緊張していないようなのだが。一五〇回の舞台経験がなせる技なのだろう。

介護保険の仕組みを分かりやすく解説したこの芝居を含む全ての脚本を手掛ける座付き作者(?)は、「一回だけだと思って引き受けた」と言う加茂紀代



子さん。驚くことに演劇経験はゼロだという。福祉のことを町の人に知ってもらいたい、在宅福祉センターがほしいなどの想いを脚本に託す。その想いが通じ、二月三日には在宅福祉センターが完成した。メンバーは不動産屋さん、町議会議員、菊師などさまざま。

小学校への出前公演の依頼もあり、臨機応変観客によって言葉使いを変え、より理解を深めてもらう工夫も凝らしている。青森や秋田、福島などからもお呼びが掛かり、その土地の名所・旧跡などを台詞に取り入れるために、出張公演では事前の取材も欠かせない。

資金不足はいつでも同じ。月五〇〇〇円の会費では舞台にかかる費用は賄えず、各人の衣裳は全部自腹の自前だ。目下の悩みはカツラの不足だそうで、「映画やテレビで使ったお下がりを探しているけどなかなか見つからない」と菊地さんは嘆いていた。お心当たりの方は是非殿様にこ一報を。これは介護保険の言うところの横出しサービ

ス？

■連絡先 菊地真一
TEL 〇二二四一五四一五三一